２年１組の実践

東藤　諒(体育科)

１．２年１組における９つの資質・能力発揮のための学習方法の共有

（１） 理解

９つの資質・能力を理解できるように、それぞれの資質・能力を具体的な姿とともに紹介した。下位項目についても難しい言葉での説明は避け、日常生活や学習場面で実際に見られる行動や発言を例に挙げ確認しながら、児童が身近なこととしてとらえられるようにした。

資料１　９つの資質・能力の理解

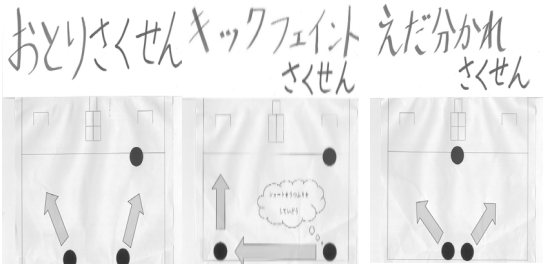
その際に、これまで学習してきたことや学校生活をふり返り「頑張っていた自分たちの姿」を出し合う場を設けた。自分や友達の行動を基に、それがどの９つの資質・能力につながるのかを考えることで、自分事として理解することができた（資料１）。

このように、児童は９つの資質・能力をめざす姿として具体的にとらえ、これからの学習や生活で意識して取り組もうとする姿が見られた。

（２） 意識化・省察

体育科「シュートゲーム」の単元において、本単元では、伝える力を発揮するための学習方法を共有する授業を行った。まずお試しのゲームを行い、ゲームの仕方を理解した。次にシュートの仕方を練習してシュートの技能を高める学習を行った。その際に、蹴りたい方向に足を向けるとよいことに気付いていた。一方、ポイントを理解しているが蹴りたいところに蹴ることが難しいと感じている児童もいた。

本時では、たくさん点を取るためにどうするか問い、点を取るために自分が考えた作戦を動作や言葉で友達に伝えることができることをねらいとした。伝える力を身に付けていくことを授業の冒頭で確認した。「意識化」では、次に、これまでの学習してきたことをふり返り、課題となることを共有した。児童は、「相手がいる時に点をたくさん取るのは難しい。」「チームで協力して点を取りたいけど、どう動けばいいかわからない。」と難しさを感じていた。そこから学習課題を立て、＜たくさん点を取るにはどうしたらいいかな＞という課題を設定した。課題を解決するために作戦タイムの時間を設け、さらに自分の考えを言葉だけで伝えるだけでなく、実際に動いて動きを確認したり、作戦ボードを用いて指差しや簡単な図を使いながら説明をしたりすることができるようにした。また、「クロス作戦」「枝分かれ作戦」「キックフェイント作戦」など複数の作戦を提示し、その中から選択できるようにした（資料２）。



資料２　作戦の提示

A児は、提示されている作戦の中から、自分たちに合った作戦を選んでいた。「クロス作戦を使うと点を取れそうだ。」とつぶやき、B児に伝えていた。そこから、B児は作戦ボードを用いて、指差しや

言葉でA児に伝えていた。「一斉に走り出そう。」「真ん中でクロスしよう。」と発言した。A児の自分たちに合った作戦を考える姿や、B児の指差しを使って表現を工夫している姿は、相手や場面に合わせて言葉を選ぶ姿である。

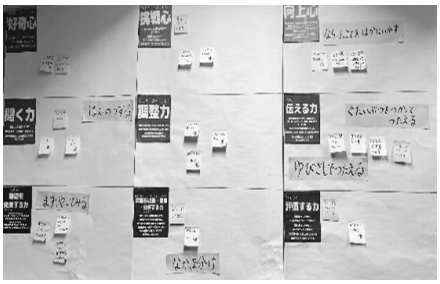
C児は、相手がいないところでシュートを打ち、よりたくさん点を取るための手段を見いだしていた。「二人で同時に分かれて動こう。」「素早くシュートを打とう。」と発言し、作戦ボードや言葉で伝えるだけでなく、実際に動いて動きを確認していた。これらのC児の姿は、相手や目的に合わせて、表現を工夫している姿である。

「省察」では、これらの児童の姿を、伝える力を発揮した具体的な姿として価値付けた。「相手に伝える時は、指差しで伝えると確認できた。」という発言があった。そこで、「伝える力」を発揮するための学習方法として、「指差しで確認する」という言葉で共有した。また、「作戦ボードを使うと分かりやすく伝えられた。」という発言もあり、「ものを使って伝える」という言葉で共有した。

このように、伝える力を「意識化」し、発揮された場面を「省察」することで、学習方法を得ることができた。

（3） 汎用化・見える化

体育科以外では、算数科「たし算とひき算のひっ算」の単元では、「伝える力」を発揮するために、図や具体物を指差しながら数量の変化を確かめたり、操作活動を通して考えを伝え合ったりしている。これらの二つの学習方法を見て、「指差しで伝える」「具体物を使って伝える」という「汎用化」された学習方法を得た。



資料３　９つの資質・能力の掲示

このように、各教科の学習を通して得られた具体的な学習方法は、「省察」の場面で付箋に書き溜め、９つの資質・能力の周囲に整理して掲示した。そこから共通性の高い学習方法を抽出し、汎用化された学習方法として児童が必要に応じていつでも参照できるよう、「見える化」した（資料３）。

２．成果と課題

低学年の段階では、児童が自ら９つの資質・能力をとらえてふり返ることが難しいと感じる場面も多く、教師が価値付けを行うことを重視した。９つの資質・能力を授業冒頭に提示し、「今日はどの力を使うのか」「どんな力がついてほしいか」を教師が明確に示した上で学習を進めた。学習の途中やまとめの場面では、教師が児童の行動や発言を取り上げ、「今の姿は○○の力だね。」と言葉にして価値付けることで、児童が学習と９つの資質・能力とを結び付けてとらえられるようにした。このような関わりを継続することで、次第に児童からも「この時間は伝える力を使った。」「挑戦心で頑張った。」といったように、自分の学びを資質・能力と結び付けてふり返ったり、意識したりする場面も見られるようになった。

一方で、教師が価値付けを主導することで、児童が受動的にとらえてしまう場面も見られた。また、提示したものに意識が集中し、他の９つの資質・能力の発揮を十分に拾いきれないという課題もあった。今後は、教師の価値づけを基盤としながら、児童自身が気付いた力を言葉にできる場面を徐々に取り入れるなど、発達段階に応じたかかわり方を工夫していく必要がある。

２年２組の実践

藤原 由依(算数科)

１．２年２組における９つの資質・能力発揮のための学習方法の共有

（１） 理解

９つの資質・能力の内容を具体的に理解するために、まず９つの資質・能力を紹介した。その際、名称を示すだけでなく、「どんな力なのかな。」「どんな場面で使っている力かな。」を問いかけ、児童が自分の言葉で考え直す活動を行った。さらに、９つの資質・能力に設定されている下位項目についても取り上げ、生活場面や学習場面で見られそうな児童の姿を考えさせた。具体的な行動や様子を挙げながら話し合うことで、児童はそれぞれの９つの資質・能力をより身近なものとしてとらえることができた。

さらに、生活科の学習と関連付け、１年生を学校探検に案内するために必要なことは何かを考えさせた。その中で、それぞれの活動において、どのような９つの資質・能力が発揮され、育まれるのかを考える場を設けた。

このように、９つの資質・能力を紹介し、身近な生活や学習の場面と結び付けて考えることで、児童はそれぞれの９つの資質・能力について自分のこととして考え、理解を深めていくことができた。

（２） 意識化・省察

算数科「かけ算」の学習において、情報を収集・整理・分析する力や挑戦心を発揮するための学習方法を共有する授業を行った。

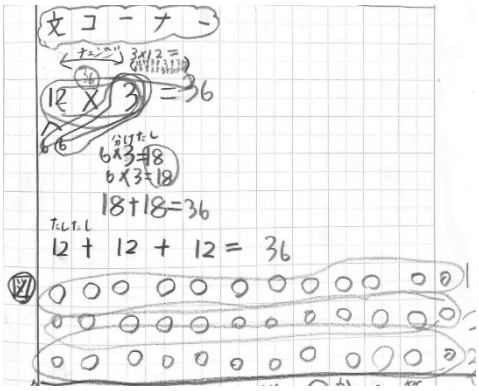
本単元は、既習の「たすたす作戦（同数累加)」や「前たし作戦（乗数が１増えると積は被乗数分だけ増える)」に加え、本単元で扱う「チェンジ作戦（被乗数と乗数を入れ替えても積は変わらない)」や「分けたし作戦（結合法則)」といった考え方を活用し、６、７、８、９、１の段の九九の構成をしていく。

本時では、かけ算のきまりや九九表の規則性を基に考える活動を通して、簡単な場合の２位数と１位数のかけ算の仕方を考え、説明することができるようにすることをねらいとした。授業の冒頭では、情報を収集・整理・分析する力と挑戦心を育てていくことを伝え、発揮してほしい９つの資質・能力を児童に「意識化」した。その後、答えを見つけるためにはどのような情報が必要かを意識できるよう、「１つ分の数」や「いくつ分の数」が不足している問題を提示した。児童からは、「１つ分の数が分からない。」「いくつ分かが分からないと、かけ算の式は立てられないよ。」といった発言があり、必要な情報を意識しながら問題をとらえようとする姿が見られた。ここから＜どのようにもとめるのかな＞という課題を設定した。課題解決に向けて、児童が自分に合った方法で情報を収集できるよう、動画コーナー、絵コーナー、文コーナーの三つのコーナーを設けた。児童は、自分に合ったコーナーで情報を集めるだけでなく、複数のコーナーを行き来しながら必要な情報を集める姿を見せていた（資料１)。

資料１　動画コーナーで情報を集める様子

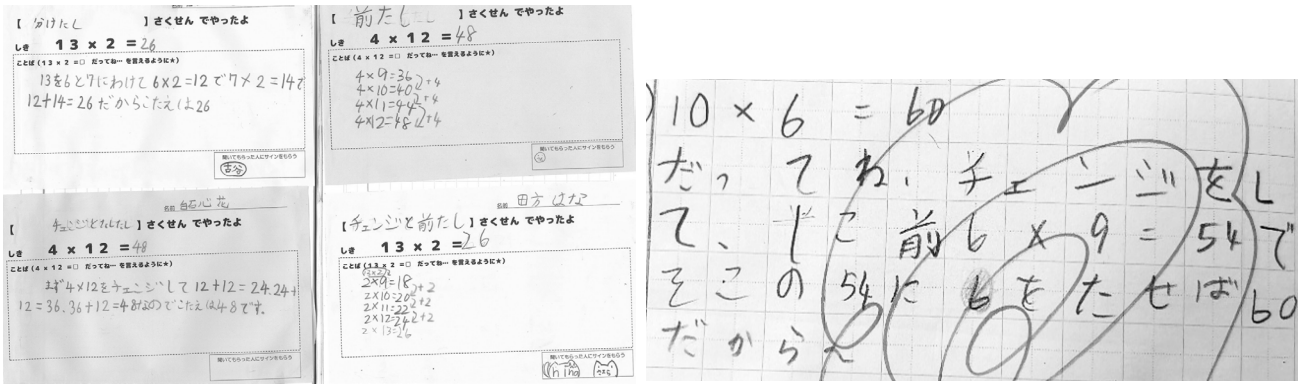
活動が進む中で、「かけられる数が９よりも大きくなっている」という気付きが児童からうまれた。これを受けて、課題を＜かけられる数（かける数）が９より大きいとき、どのように求めればよいのかな＞と設定し直した。

児童は、これまでの学習を手がかりに、「分けて考えるとできそうだ。」「九九を使えば求められそうだ。」と見通しをもちながら、意欲的に考えを深めていった。A児は、12×３の計算において、12 を６と６に分けてそれぞれを３倍し、出た答えを足す「分けたし作戦」を用いて答えを求めていた。数量を分けて考えることで、これまでに学習した九九を生かそうとする姿が見られた。B児は、12×３を 12＋12＋12 と考え、「たすたす作戦」を用いて答えを求めていた。かけ算をくり返しのたし算としてとらえ、分かる方法で粘り強く計算しようとする姿が見られた。C児は、12×３を３×12 に置き換える「チェンジ作戦」を使い、３×９＝27 を求めた。その後、残りの３を足していくという「前たし作戦」と組み合わせて考え、答えを見いだしていった。既習の作戦を組み合わせて使い、より分かりやすい方法を選んで計算しようとする姿がどの児童にも見られた。これらの児童の姿は、これまでに学習してきた作戦を基に、課題解決のために自分なりの方法を選び、工夫して考えようとするものであり、挑戦心を発揮している姿である（資料２）。



資料２　様々な方法で解いているノート

ここで、拡張した九九表を提示し、12×３の欄が埋まったことを示した。すると、児童から「他の空欄の計算もできるよ。」という声があがった。児童は、これまでに学習してきた作戦を使いながら、選んだ問題に意欲的に取り組んだり（資料３・右）、一つの問題が解けると、さらに別の問題にも挑戦しようとしたりする姿が見られた（資料３・左）。



資料３　二つ選び、意欲的に取り組んでいるノート（左）・別の問題に挑戦するノート（右）

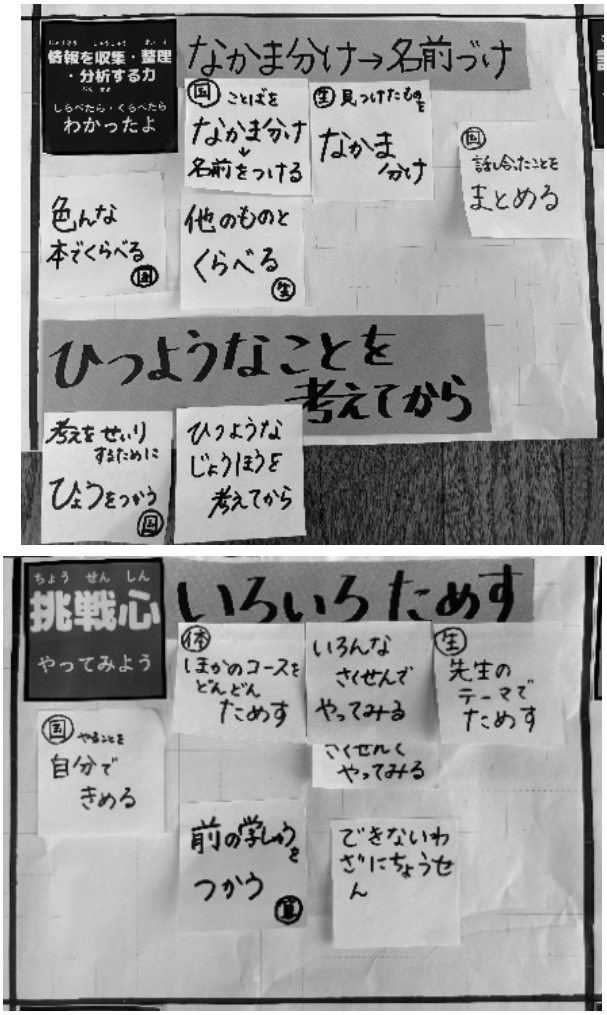
「省察」の場面では、学習の中で見られた児童の姿を基に、情報を収集・整理・分析する力や挑戦心が、どの場面で発揮されていたのかをふり返った。情報を収集・整理・分析する力については、児童から「どんな数が必要か考えたときだよ。」「いろんなコーナーから情報を集めたときだよ。」といった発言があった。また、「必要な情報を考えてから、情報を集めるといいよ。」という声もあがり、目的をもって情報を集めることの大切さを理解している様子がうかがえた。このことから、情報を収集・整理・分析する力を発揮するための学習方法として、「必要な情報を考えてから」という言葉で共有した。また、挑戦心については、児童から「いろんな方法で解いたときだよ。」「一つだけでなく、別の問題に取り組んだときだよ。」といった発言があった。このことから、挑戦心を発揮するための学習方法として、「いろんな作戦（方法）でやってみる」という言葉で確認した。

このように、情報を収集・整理・分析する力や挑戦心を「意識化」し、発揮された場面を「省察」することで、学習方法として得ることができた。

（３） 汎用化・見える化

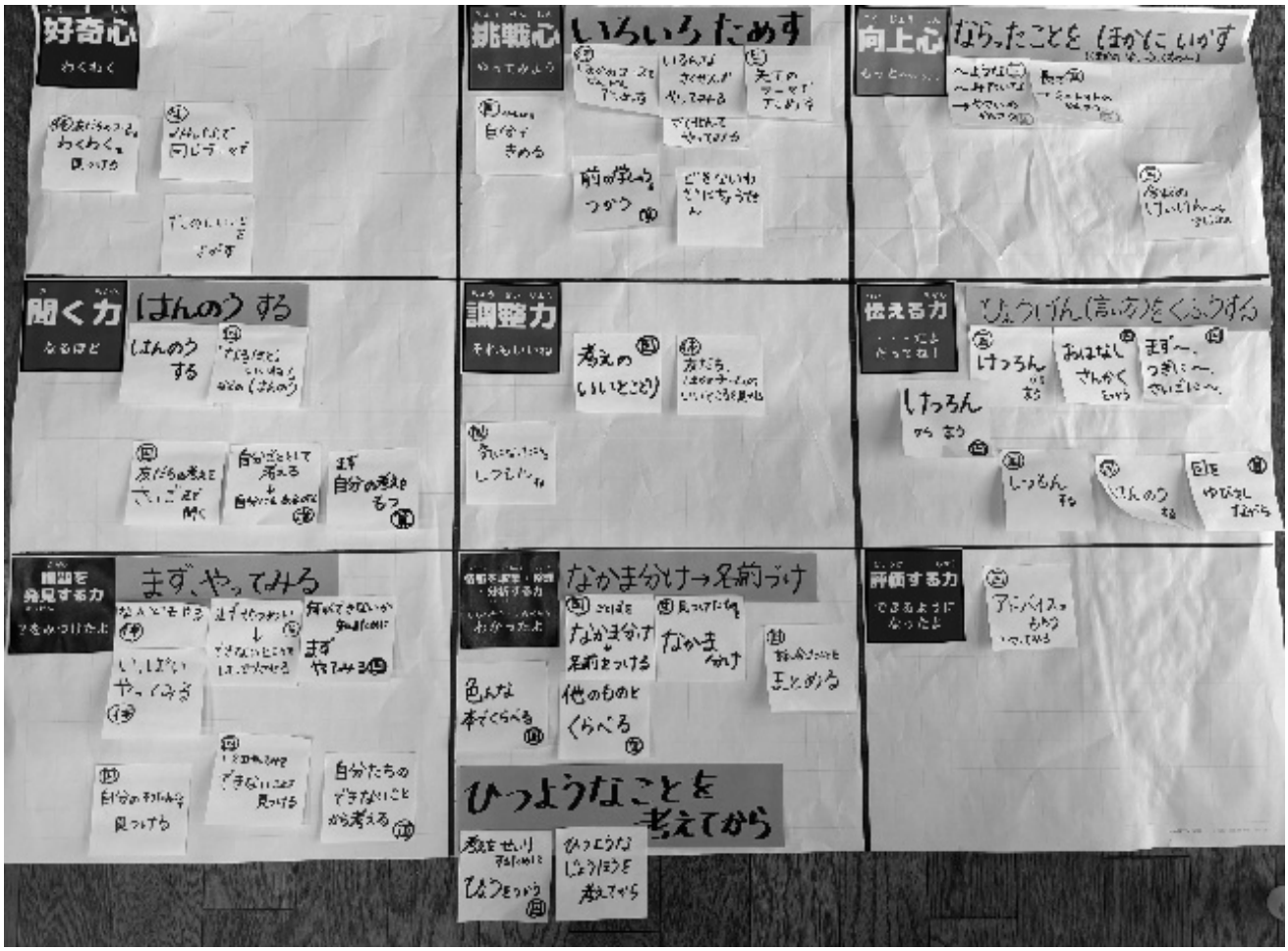
算数科「九九をつくろう」の単元では、情報を収集・整理・分析する力を発揮するための学習方法として、「必要な情報を考えてから」があった。また、国語科「どうぶつ園のじゅうい」の単元では、情報を収集・整理・分析する力を身につけることをねらい、獣医さんの仕事の「すごい！」と思うところをまとめる活動を行った。児童は、まず自分が伝えたいことは何かを考えてから情報を整理し、まとめる文章に取り組んだ。文章を書く前に、自分の伝えたいことを明確にすることで、「どの情報を使えばよいか」を考えることができた。この学習をふり返る中で、「まず伝えたいことを考えてから、整理して書けたよ。」という声があがった。そこから、情報を収集・整理・分析する力を発揮するための学習方法として、「伝えたいことを考えてから」という学習方法を確認した。これら二つの学習方法を比較し、情報を収集・整理・分析する力を発揮するためには、「必要なことを考えてから」という、汎用化された学習方法を共有することができた（資料４・上）。

算数科「九九をつくろう」の単元では、「挑戦心」を発揮するための学習方法として「いろんな作戦（方法）でやってみる」があった。また、体育科「跳び箱をつかった運動遊び」の学習では、挑戦心を身につけるために跳び箱運動につながる動きを練習できるコースをサーキット形式で設定した。苦手意識をもっている児童も多く見られたが、「できそうなところからやってみよう。」と、いろいろなコースを回りながら、自分に合った練習に挑戦していた。この学習をふり返る中で、「いろんなコースを試してみたから、できるようになった。」という声があがった。そこから挑戦心を発揮するための学習方法として「いろんなコースを試す」という学習方法を確認した。



資料４ 「汎用化」された学習方法

また、生活科「うごくうごくわたしのおもちゃ」の単元では、単元の導入として、教師が示した紙コップと輪ゴムを使ったおもちゃ作りに取り組んだ。児童は、教師が提示したテーマを基に、まず作って動かしてみることから始め、「どうやって動かすとよいか」「どんな作りにするとよく動くか」を考えていた。試していく中で、動かし方を変えたり、輪ゴムの付け方や数を変えたりしながら、自分なりに工夫しておもちゃ作りに挑戦していた。この学習をふり返る中で、先生のテーマに沿ってまず試してみることで、次に何を工夫すればよいか見通しをもつことができると理解し、挑戦心を発揮するための学習方法として「先生のテーマで試す」という汎用化された学習方法を得た。これら三つの学習方法を比較し、挑戦心を発揮するためには、「いろいろ試す」という、汎用化された学習方法を共有することができた（資料４・下）。



資料５　「見える化」された学習方法

このように各教科で得られた具体的な学習方法は、省察時に付箋で記録し、９つの資質・能力ごとに位置付けて掲示した。そこから得られた汎用化された学習方法は、児童がいつでも見て使えるように、カードにして付箋と同様に９つの資質・能力ごとに掲示し、「見える化」した（資料５）。

２．成果と課題

どの教科の学習においても９つの資質・能力を「意識化」してきたことで、児童から９つの資質・能力に目を向けた発言が自然に生まれるようになった。具体的には、「この学習では伝える力がつきそうだね。」「○○さん、その姿は挑戦心がついているね。」など、教師が提示しなくても、児童自身がその学習で発揮できそうな力を考えたり、児童同士で９つの資質・能力の視点から評価し合ったりする姿が見られた。これは、９つの資質・能力を教科横断的な視点として継続的に扱ってきたことで、児童が自らの学びを９つの資質・能力の観点からとらえ、価値付けようとするようになった成果であると考えられる。

一方で、９つの資質・能力は明確にすみ分けられるものばかりではなく、互いに重なり合う部分が多い。そのため「省察」時に、全員が納得感をもって同じ９つの資質・能力としてとらえることの難しさを感じた。また、授業の冒頭で教師が「この授業では聞く力を発揮してほしい」と「意識化」を図った場合でも、児童からは「今日は伝える力がつきそうだね。」といった異なるとらえが生まれる場面があった。その学習でどの９つの資質・能力が発揮されるかについては、教師が一律に決めるのではなく、児童自身が判断し決定してもよかったのではないかという課題も見えてきた。

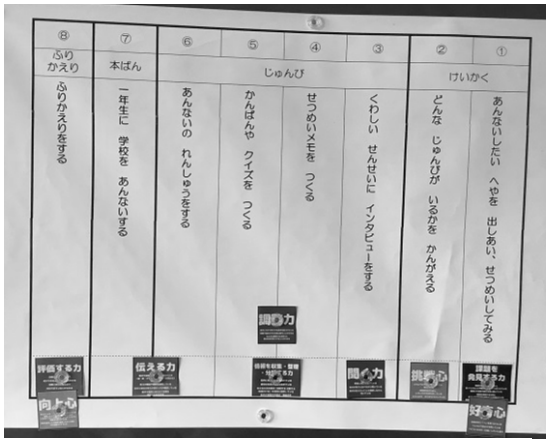
２年３組の実践

余川　紀子(道徳科)

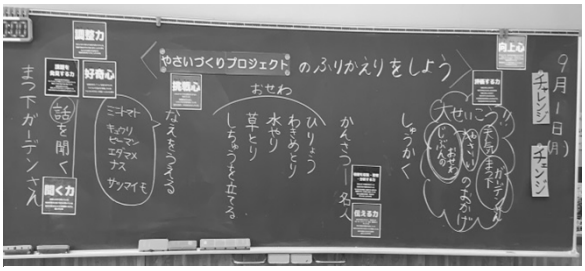
１．２年３組における９つの資質・能力発揮のための学習方法の共有

（１） 理解

９つの資質・能力のそれぞれの内容を具体的に理解するために、まず、一つ一つの意味を確認し、児童自身の言葉で言いかえて整理した。そして、生活科の「一年生に学校を案内しよう」の単元計画を立てる際に、どの時間の、どの学習場面で、どの力を活用するのかを見通した（資料１）。例えば、それぞれの特別教室に詳しい先生にインタビューをして調べる時間には聞く力、校内を一年生と回って分かりやすく説明する時間には伝える力など、具体的な姿を例示することで理解を深めることができた。また、単元の終わりには、どんな場面で力を発揮できたかをふり返るようにした。できるようになったことや、もう少しだったことを話し合うことで、評価する力についても分かってきた。同じように、生活科の「ぐんぐんそだてわたしの野さい」や「生きものなかよし大さくせん」の単元でも、単元計画で発揮する力を見通したり、ふりかえりでついた力を確認したりした（資料２）。



資料１　生活科の単元計画



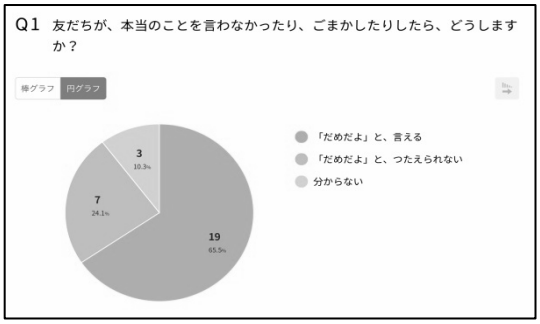
資料２　単元の振り返り

このように、単元の初めと終わりに、９つの資質・能力について意識する時間を設けることをくり返すことで、９つの資質・能力のそれぞれの内容や具体的な姿を理解していくことができた。

（２） 意識化・省察

道徳科「『おれたものさし』Ａ善悪の判断、自律、自由と責任」の授業において、課題を発見する力を発揮するための学習方法を共有する授業を行った。

本教材でのねらいとする道徳的価値は、物事の善悪について的確に判断し、自ら正しいと信じるところに従って主体的に行動すること､自由を大切にすると共に、それに伴う自律性や責任を自覚することである。導入では、「友達が、本当のことを言わなかったり、ごまかしたりしたら、どうするか」という事前アンケートを行った（資料３）。その結果では、多くの児童が「『だめだよ』と言える」と答えていたが、「『だめだよ』と伝えられない」と答える児童も２割程度いた。友達のごまかしを見逃さずに、注意できる方が正しいと分かっていても、相手への遠慮などから、正しい行動ができないことがあると､全員が納得することができた。



資料３　導入時のアンケート

そこで、＜正しいと思うことをするために、大切なことは何かな＞という課題を設定して、授業を進め

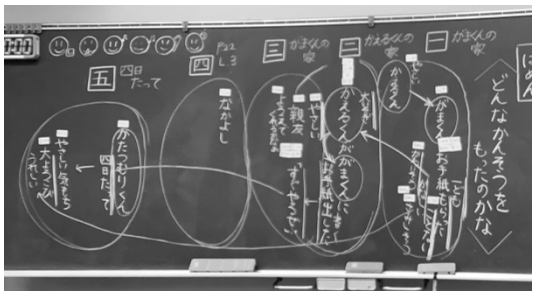
た。

授業を進める中で、「正しいことができる勇気」「周りの人や相手のことを考えて」「よくないことは、よくない」の三つのキーワードが出てきた。児童のふりかえりからは、「勇気を出して、それはいいかどうか考えてから言いたい。」「勇気を出そうとしても、言いにくい。そんな時こそ、思い切って勇気をフルパワー出す。出し過ぎたら、相手が傷つく。逆に、あまり出さなかったら、伝わらない。ちょうどいいぐらいの勇気を出す。」「前は、何でも『だめだよ。』と言ってしまうこともあったけれど、これからは、相手の気持ちを考えてから言いたい。」とあった。これは、アンケートの結果やこれまでの自分の姿から、「こうなりたい」や「なりたい自分になるために、どうしたらいいか」という課題を見つけて取り組めたからだと考える。

このように、本授業では、アンケートの結果などの実態から、課題を発見することができた。課題を発見する力を発揮するための学習方法として、「『こうなりたい』を考える」という言葉で共有した。

（３） 汎用化・見える化

国語科「お手紙」の単元では、初発の感想を交流することを通して、みんなで解決したい課題につなげた（資料４）。一場面や二場面、三場面のがまくんとかえるくんの様子に、児童の感想が集まっていたので、二人の気持ちをそれぞれの場面で読み取ったり、どうしてかたつむりくんに手紙をお願いしたのかを考えたりすることができた。ここでは、課題を発見する力を発揮するための学習方法として、「初めの感想から考える」を共有した。



資料４　初発の感想の交流

また、道徳科「『わすれられないえがお』Ａ善悪の判断、自律、自由と責任」の授業においては、課題を発見する力を発揮するための学習方法として、「自分の『できない』を考える」を共有した。導入で、「よいこと」をキーワードとして提示し、児童が考えるよい行動を挙げさせ、それがよいと分かっていても、迷ってしまい行動できないことがあることを確認した。道徳科では、問題意識をもって課題をとらえ、自分事として自分の日常を振り返ることには至らないことがあるが、自分たちの実態を基に課題を見つけることで、自分事としてとらえ、意欲的に考えることができた。

これら三つの課題を発見する力を発揮するための学習方法から、「初めの自分の姿や考えから考える」という、「汎用化」した学習方法を得ることができた。また、獲得した学習方法は、いつでも児童が意識できるように教室に掲示している（資料５）。

資料５　９つの資質・能力の掲示

２．成果と課題

課題を発見する力を発揮するための学習方法を、学級全体で共有し、くり返し意識付けることで、児童が主体的に学習に取り組むようになったと感じた。国語科や道徳科だけではなく、算数科の授業では、既習の方法以外で解決できないかと考えたり、生活科の活動では、「もっと○○したい」と児童から目標を提示したりできるようになってきた。今後、道徳科においては、学習課題にスムーズにつながるよう、

児童自身が自分の実態に気付くような導入の工夫をさらに模索していきたい。